

かつて栄屋酒店は日本の銘酒といわれる酒瓶をずらり並べ、屈強な栄治は精力的に配達に走り回っていた。それに栄屋酒店は夕焼け通り商店街の憩いの場でもあったのだ。

仕事帰りの職人たちがするめやピーナッツを肴に、息抜きにちよつと立ち寄って話をしてコップ酒を飲んだものだった。

しかしそんな時代はとつくに過ぎ去り、大型で郊外型のディスカウントの酒屋ができ始めた。その頃、人々はすでにマイカーを持っていたので、重いビールのケースや酒瓶をカートに入れて買い、自分で車で積んで持ち帰る。もう酒屋に運んでもらう必要がなくなつたのである。そこに規制緩和が追い討ちをかけた。

酒屋は既得権を失い、どこの大型ショッピングモール

らしいの婆さんがやつとつた。わしらはくじを引くのが楽しみで、楽しみで、胸がどきどきしたもんや。くじを引いて当たりがでると、跳び上がって喜んでの「

そう言う自動販売機の灯りめがけて殺虫スプレーを吹きかけてからタオルで自動販売機を拭いた。徳平はふだん通りの何気ない調子で「栄治さんよ」と声をかけた。

その声に栄治は振り向いた。栄治は丸顔で頭ははげつるつるでお腹がせり出し、まるで小さな大黒様といったところだ。ふさふさの白髪で痩せて背が高い徳平とは対照的な容貌だ。

「まだ五月になって間もないで。虫も出ていないのに殺虫剤はいかんやろ。オゾンホールが益々大きくなつとるといふし、わしらもちゃんと環境問題について

やスーパーマーケットでも、コンビニエンスストアでさえもアルコール類を取り扱うことができるようになり、客をみんなそちらの方にとられてしまった。

今の栄屋では店の前にずらりと陣取つた自動販売機が一番の稼ぎ頭となっている。栄屋の店は古ぼけて見え、店前に設置してある自動販売機と去年取り替えたピカピカのアルミサッシの戸はいかにもこの店には不釣り合いだ。

徳平はこつそりと栄治の様子を窺つた。するとぶつぶつと独り言をつぶやきながら栄治がタオルで自動販売機を一生懸命に磨いていた。

「なあ、自販機ちゃんや。今は昔の物語やけど、ここらもそら、賑やかやつたんやで。ウチの西隣りは『くじ屋』という駄菓子屋での。しわくちやの百歳く

かんがえんといかんのと違うか。こんな小さい商店街に住んどつてもグローバルな考えを身につけにやの」

栄治は徳平の姿を見るとうれしそうに笑つた。

「お、徳さんやないか。なにに、『グローバルな考え』やと？ なんとまあ、徳さんもえらいリクツげになつたの」

徳平は栄治の独り言の噂はやはり本当だったと心中がつくりしていたのだが、その気持ちをぐつと抑えて表には現さなかつた。栄治は片手に殺虫剤、もう一方の手にタオルを持って尋ねた。

「ところで徳さん、なんの用や」

「用がなかつたら来たらいかんのか」

「そんなことはないけど、単にご機嫌伺いとも思えんの」

「残念でした。そのご機嫌伺いや。相変わらずたつしやみたいやの」

「ぼちぼちというところや。ま、せつかくやから中に入りまじ」

栄治は新品の引き戸を開けて店の中に入り、徳平も後に続いた。

「表の自販機の明るさと比べて中は相変わらず暗いの。ねずみの穴倉に入るみたいや。もう少し蛍光灯の数を増やして、商売つ気を出しまい。せつかく磨いている酒瓶が少しも目立たんやないか。ほれ、その越後の吟醸酒。とつくに売れとるかと思つたらまだあるやないか」

徳平は周りを見回しながらぶつぶつと憎まれ口をたたき、帳場横のカウンターの前に置いてある丸イスに

ることをずばりと言つてみ」

そう言われても徳平は言葉が出なかつた。その代わりに栄治が苦笑いしながら言つた。

「商店街で栄屋の栄治はトンチンカンになつるといふ噂があるやろ」

「そなたな噂なんかわしは知らん」

「徳さん、あんたも相変わらずやさしいの。けど、他の人が何を言つてもかまわんが、徳さんだけには聞いておいてほしいことがあるんや」

そう言われて徳平は黙つて頷き、栄屋の栄治はしみみとした口調で語り始めた。

栄治の父親は躰にはぎびしい親だつた。小さい時から店の手伝いをさせられたし、なによりも、男は口数少なくいつも毅然とした態度をとるべし、と徹底して

座つた。

「徳さんが来たのはそんな話をしに来たわけやあるまいて」

カウンターを挟んで栄治が腰を下ろした。ずばり核心をつかれてもともと口下手な徳平は詰まつてしまつた。商店街の人たちの心配を栄治の自尊心を傷つけないように遠まわしに、しかもうまく話すにはどうしたらいいのか、皆目見当がつかなかつた。栄治は徳平の心中を察したかのように助け舟を出した。

「徳さんが来たのはこの夕焼け通り商店街で噂になつてゐることを確かめようとしに来たんやろ」

「うん？ 噂……。なんのことかいの」と徳平は空とぼけた。

「あんたとわしの仲や。遠慮はいらん。気にかかつと

教えられた。男は女々しいところをみせてはいかん。

人前で泣くなんでもつてのほかである。頼りにされる人間になれ云々。

栄治はその言いつけを守つて今まで虚勢を張つて頑張つて生きてきた。だから店が空襲で丸焼けになつても、父親が戦死しても、母親が亡くなつても、息子の祐一が電撃事故で亡くなつても、そしておかみさんが病死しても、その時に感じたはらわたが千切れるほどの悲しみをぐつとこらえて、一家の大黒柱として振舞つてきた。いろんな感情を飲み込んで表には決して出さなかつた。

「だけどの、徳さんや。わしはもう七十四歳や。かかあも三年前に亡くなつた。わしの方が先に逝くと思つたのに、あんな頑丈だつたかかあがくも膜下出血

であっけなくぼつくり逝ってしもうた。わしの命なんていっつどうなるかわからん」

栄治の話の方向がどこに向かっているのか、さっぱりわからないまま徳平はうなった。

「うむ、人の命なんていっつどうなるかわからんの。それは賛成やけんど、うちのかみさんは百まで生きるというとし、わしもなんかそんな気がするんや。それに男やって平均寿命が八十近くなつとるから、あまり心配はせんほうがええ。栄治さんは長生きするで」

栄治は徳平の話が耳に入らないかのように続けた。

「そこでわしは思うたんや。わしの身体の中は悲しかったこと、うれしかったこと、悔しかったことなんか感情でいっぱいなんや。今にも張り裂けそうや。そこでもうこの年になつたらええやないかと思うての。」

いる。栄治にとって自動販売機は酒屋にとっては命綱だし、ペット以上のものかもしれないと思いなおした。そう解釈すると話しかけるといいう行為にも合点がい

く。

「わかった。ようにわかった。思ったことは口に出して言うたらええ。気持ちのため込んで我慢してもなかなかならん。しゃべることで気持ちが軽くなるのならええことや」

栄治は徳平がこう言ってくれたことに満足した様子だった。それからひとしきり商店街が一番華やかで忙しかった頃の話をしたり、将棋談義をしてくつろいだ。やがておもむろに栄治が言った。

(以上2月20日放送分)

雄々しかつても、女々しかつても年に免じて許されるやろ。わしは親父の寿命をとうに越した。もう無理に男らしくせんでも許されると思うとる。今まで七十余年、ため込んできた気持ちを外に吐き出し身軽になろうと、思ったことをどんんしゃべり、悲しかったらがん泣こうとな。他の人にはどう思われてもええ。だけどな、そのことを徳さんには承知しておいてもらいたんや」

この言葉を聞いて徳平は一応はほっとした。栄治の話は筋が通っているからだ。『わしは思うたことを声に出して言うことにした』というところにも賛成だ。だが何も自動販売機に向かつて話しかけることもないだろうに、と徳平は内心首を傾げた。とはいっても、ペットの犬や猫に向かつて話しかける人はいくらでも